

## 小学3～6年生の読み困難に関する調査研究

～文章理解の困難さに着目して～

梅田 真理

近年ICT活用が一層盛んになり、小学生でもスマートフォンを一人1台持つような状況にある。文字を読み上げるアプリケーションも一般的になり、聞いて理解することができるような仕組みも増えてきている。しかし、学校教育においては、ICT活用は進んでいるものの児童生徒が紙に書かれた文字を読むことが学習活動の重要な柱となっていることに大きな変化はない。このことはすなわち、「読む」ことに困難のある児童生徒は学習活動全てにおいて困難を抱えていることを示唆している。

一方で、発達障害については、社会全体でもその特性等が広く知られるようになってきているが、多くは行動等の問題が顕著なADHDやASDであり、学習の困難を示すLDについては未だ十分な理解がされていない状況である。平成24年に行われた文部科学省の調査結果では、通常の学級で何らかの特別な支援を必要とする児童生徒の割合6.5%うち、4.5%が学習面で著しい困難を示す児童生徒であり、行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合を上回っていた。この4.5%は、「文部科学統計要覧 平成31年度版」の小中学生数(2018年5月1日時点)に照らし合わせると約436,000人であり、多くの児童生徒が学習の著しい困難を抱えた状況であることが推測される。しかし、この学習の困難についての分析や検討は十分に行われているとは言い難い。

林氏の研究は、日本LD学会が開発したLD-SKAIPを活用したものである。LD-SKAIPは主に教師が児童の学習のつまずきに気づいた際に、その状態や要因についてアセスメントを行うためのツールである。林氏はLD-SKAIPの中でも「ステップⅢ 読み検査」で得られたデータを詳細に分析し、「読み能力の発達の変化」、「通

常の児童と読み書きに困難のある児童との読み能力の変化」、「読解課題の誤答分析」について検討した。年少の児童より年長の児童の方が読む速度が速かったり、読解がよくできたり、「なぜ」「どうして」などの質問に適切に答えられない児童が多いことなどについて、教師であれば経験則で理解はしているものの、具体的にどのような差があるか、誤りの傾向はどのようなものであるか等、詳細な検討を行っているわけではない。つまり、児童生徒の抱える学習の困難の背景要因は教師にとってわかりにくく、気づきが個々の困難さに応じた指導に結びついていないということである。本研究では、データを詳細に分析することによって、「なぜつまずいているか」「何に困難があるか」について明らかにしようとしており、そこから具体的な指導についても提案している。これは現場の教員にとって貴重な提案である。さらに「読む」ことに関して、音読そのものは機器で代替することは可能であるが、文章読解の基礎となる語彙、文法の知識、推論などの力については焦点を絞った支援が必要であることも指摘している。理解に関する力はすべての学習の基礎となることであり、非常に重要な指摘である。

今春から学習者用デジタル教科書が市販される。このような新たなツールの有効活用のためにも、教師が扱えるアセスメントの開発やその結果に応じた指導方法の検討に関してさらに研究を深めていただくことを期待する。

### 【文献】

文部科学省(2012)「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」

文部科学省「文部科学統計要覧 平成31年度版」